

大熊狸喜

表紙イラスト下南かめ

銀河剣豪

山ガシ  
バキ  
修行中!

試し読み版



当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『銀河剣豪ムサシノ・ツバキは修行中!』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

銀河剣豪

山崎ハルハは  
修行中!

大熊狸喜  
表紙 / あかめ

## 登場人物紹介

Characters

---

### ムサシノ・ツバキ

セミロングの黒髪と大きな垂れ目、豊かなバストとヒップが目立つ、ビキニ姿の女の子。惑星外交時代の真っ直中にありながらも、いまだ日本刀を用いて戦う日ノ本一真流の剣豪として、武者修行の旅を続けている。

西曆三四五六年。地球は惑星外交時代の真っ直中にあつた。

数百種に及ぶ他惑星の知的生命体と豊かな交流をし、同じ銀河系内に地球国家の宙域と百数十の移民星や、地球連邦の所属惑星を領有している。

地球領の惑星「スリジッド」は、数世紀前の、惑星移民初期の星である。

銀河でもすでに田舎扱いされていて、お世辞にも近代的とは言えない。しかも一日が十八時間と、地球領の標準時間としても中途半端に短い為、訪れる人も少ない。

そんな惑星の、さらに雑草が茂る昼過ぎの田舎道を、メカホースに乗った一人の少女がノンビリと旅をしていた。

「まいったなあ、山道ばかり……そろそろ村でも見つけないと、今夜は野宿だわ」平均的な身長に、黒い髪をセミロングで伸ばした少女の名は、ムサシノ・ツバキ。

大きく能天気なタレ目と細い鼻筋、小さな口元が幼い印象の愛顔を見せている。細い首から続く肢体は、華奢な背中に反して大きな乳房と、細いウエストと豊かなヒップ。

首には真つ赤なスカーフがひらめき、なめらかな身体を包むのは同色のビキニ。黒系の指抜きグローブとヒザまでのブーツと、これだけだったら普通のスタイル。

しかし少女が異質なのは、左の腰に携えた実体の剣だった。赤い鞘に収まる緩やかな曲刀は、彼女のご先祖様が出身の地、地球は日本国の武器「日本刀」である。

携帯サイズのビームガンやレーザーソードが常識の宇宙時代を、十代後半になったばかりなこの少女は、日本刀一本で渡り歩いている様子だった。

さらに、黒い陣笠と雨避けの膝丈な外套を纏ったその姿は、まさしく旧世紀の時代劇。

小川で一休みした、ビキニで帯刀の股旅少女。さらに一時間ほど山道を進むと、山に囲まれた小さな村「セリン・ブレッジ」にたどり着いた。

セリン・ブレッジは、旅人たちの休息所みたいな村だ。周りは山と田畑しかないけど、小さな売店や宿屋を兼ねた酒場なども存在している。

「よかった。今夜の宿はなんとかなりそうだわ」

大通りを、馬を引いて歩きながら、ツバキは人の姿が殆どない事にも気がついた。

「……あんまり流行ってない村なのかも」

まだお昼ご飯を食べてなくて、とにかくお腹が空いている。

手頃な一杯飯屋にでも立ち寄って、今夜の宿を手配しようとした少女剣士は、突然、建物の陰から姿を現した三人ほどの男たちに囲まれた。

「ようお姉ちゃん、一人旅かい？」

男たちはみなニヤニヤして目つきが悪く、ナマズのような顔に無精髭を生やしており、腰にはガンベルトを下げている。

いかにも悪質な男たち。あげく、薄い素材の外套から覗ける、起伏に恵まれたビキニの

7

肢体を、イヤらしい視線で舐めるように上下の往復。

「何ならオレたちが、極上の宿を世話してやるぜえ。セックスつきのな。ヘッヘッヘ」  
品性なく大きな笑い声。気づいた町の人たちが、窓の隙間から覗いている。

背後のナマズが、馴れ馴れしく肩に触れる。

その直前、能天気っぽいツバキは、一瞬で反応した。

「結構です。フンっ！」

不埒な男の掌を掴むと、捻りながら片足を引っかけて転倒させる。大の男が華奢な少女にひっくり返されると、途端に残った男たちの顔に怒りが湧いた。

「コラ小娘え、人が親切に言つてやつてんだらうっ！」

リーダーらしき大柄な男が、意気込んでレーザーガンに手をかける。

しかし、殺人にも慣れていているらしい悪党たちが銃を抜くよりも早く、黒髪の少女は腰溜めからの疾走。抜刀しながら、男たちの間を走り抜けた。

「っイヤァっ！」

——っシュバっつっシャキイイイインっつ！

風のような剣戟。外套が靡いて、ピキニに包まれた巨乳がタブンと揺れる。

焦った男たちは、通り過ぎたツバキの背中に銃を向けた。

同時に、レーザーガンの銃身が音もなく本体と別離。切断された箇所は、まるで鏡のよ

うに美しい断面を見せていた。

「なっ——じゅっ、銃がっ!!」

一瞬で破壊された、三人の金属銃。目の前の出来事が信じられない男たちは、さらにガ  
ンベルトまで切り落とされていた事に絶句する。

見る見る青ざめる、ならず者たちの顔色。

ナマズフェイスのリーダーが、ハッと気づいた。

「そ、その早業、その格好、そしてその実体剣……まさか、噂の日ノ本一真流っ!」

銀河にあまねく名を知られる、最強の剣術。日ノ本一真流。

誰もが護身用としてレーザー兵器を持つこの銀河において、実体の剣一本のみですべて  
の悪を斬り伏せる、正義にして剛なる剣。

裏社会で生きる悪虐なる者たちにとっては、恐怖の対象以外の何者でもなかった。

静かに振り返る少女の瞳は、能天気な光が消えた冷静で絶対的な「二度目は無い」とい  
う、刺客の眼光。金属の銃を切断した日本刀も、刃こぼれ一つしていない。

背筋がゾクリと冷やされた悪党たちは、常套句を残して逃げてゆく。

「キっ、キショ——っ、覚えてやがれっ!」

這々の体で遁走する男たちを、黙って見送るムサシノ・ツバキこそ「第七十七代 日ノ  
本一真流 正統伝承者」なのだ。

遙か二千年以上昔の地球、日本国に生まれた戦刀術を受け継ぐ少女はしかし、先々代伝承者の祖父にして「まだまだ」と評され、新たな伝承者に指名されると母星を出立。

「らしい一年、一人銀河を巡る武者修行の旅を続けているのだ。」

「ふう……」

タレ目の黒髪乙女は静かに刀を収めると、空腹を充たすべく、一杯飯屋へと向かった。二階建ての店先にメカホースを繋いで、店内へ。

昼過ぎだからか客の姿は少なく、六つある四人掛けのテーブル席に男性が二人。そして無人のカウンター席が数席ある。

カウンターのの中には、小さな髭を蓄えた、地球人タイプに見える痩せた初老の男性がいた。店長兼料理人のようで、心なしか、突然の来客に緊張している様子だ。

「カウンター席に腰掛けて陣笠を脱いだツバキは、メニューを探すも見当たらない。」

「すみませ〜ん、何か食べられますか？」

「あ、ああ……ここの店の店は、みんな一緒さ。セリン牛のステーキと野菜サラダ、いわゆる地元料理だけさ……」

どこかよそよそしい感じに答えながら、男は厨房へと姿を消す。肉を灼く香ばしい香りが漂ってくると、少女のお腹もグーとなった。

やがて十分もしないで、料理が運ばれてくる。

ツバキの双乳ほどもある熱々ステーキと、新鮮でシャキシャキのサラダ。特にステーキは、肉独特な食欲を刺激する湯気と脂が、鼻腔をくすぐる。

「ああ、なんて美味しそうな。戴きまゝす」

早速に金貨一枚を支払った少女は、料理に向かつて手を合わせる。標準的な体軀からは想像できない旺盛な食欲を以て、数分と待たずにペロリと平らげた。

「ごちそうさまでした。ところでご主人、つかぬ事を伺いますが……」

満腹だけど引き締まって平たいお腹を、満足げにナデナデ。ほっこり笑顔のツバキだ。剣術に於いて達人の少女は、しかしそれ以外は特に強気というワケでもない、極めてフツーの天然系少女なのだ。

股旅の乙女は一晚の宿が取れるか尋ねる。

「あ、ああ……宿ならウチの二階だ。代金は、さっきの飯代に含まれてる……」

店長は客と視線も合わさず、二〇一号室の鍵を寄越す。

「ありがとうございます。あ、私はムサシノ・ツバキといいます。それでは、一晚お世話になります」

不審な態度の店長だけど、旅をしていると特別珍しい対応でもない。

与えられた部屋に入室すると、シングルベッドとテーブルと二脚の椅子、トイレ兼シャワー室という、いかにも一人部屋という造りだった。

荷物を置く前に、室内をくまなく詮索する。壁やベッド、すべての窓や扉、シャワーやトイレや鍵穴までチェックしたところ、特におかしい様子はない。

「うん、盗聴器とかの類はなし……さて、旅の汗を流そつと」

安心して、用心は用心。すべての窓と扉を施錠して、陣笠に隠した伸縮式の支え棒を扉に設置してから、ツバキはシャワーの準備。

「ふんふんふん〜♪」

陣笠と外套をハットスタンドに引っかけると、鼻歌交じりでブーツやグローブを放り出し、マフラーやビキニを脱いでゆく。

赤いトップの背中の紐を解くと、三角の生地を押さえつけられていた巨乳が、締めつけから解放される。

タップンと揺れて弾んだ双乳はできたてなプリンの如く、白くて美味しそうに、柔弾力を見せつけていた。先端の小さい媚突は明るい桃色で、穢れを知らない処女の色艶。

巨乳を支える細いウエストは締まっていて、さらにしなやか。皮下脂肪を程よく乗せながら、モデル顔負けな括れで、柔らかいカーブを描いている。

ボトムの左紐を解くと、ウエストから続くヌードヒップのライン。年齢の割に大きく発達していて、丸くて柔らかな媚尻の脂肪を、ツンと格好よく引き上げていた。

若く引き締まった下腹部は、艶っぽいカーブで恥丘に続いている。白い肌は、いまだ男

村人たちや盗賊たちに向け、濡れた処女秘処を真つ正面から見せつけられてしまった。羞恥に耐える少女剣士の心をなおも折るように、下衆な盗賊たちが好き勝手に罵る。

「っひよおおおっ、なんて柔らかそうな処女マンなんだあつ！」

「しかも、もう濡らしてやがるぜえっ！」

男たちの言葉に、ツバキは媚顔を背けたい。しかし男の掌で頬を取られると、ハッキリと見えるよう、前髪まで分けられて恥顔を公開されてしまう。

馬上の衆人視姦と公開愛撫で、性興奮しきっていた処女性器は、十分に充血して蜜を溢れさせて、濃い桃色に濡れていた。

柔らかい閉じ肉はムッチリと開き、薄い包皮からは肉色のクリトリスが覗けている。

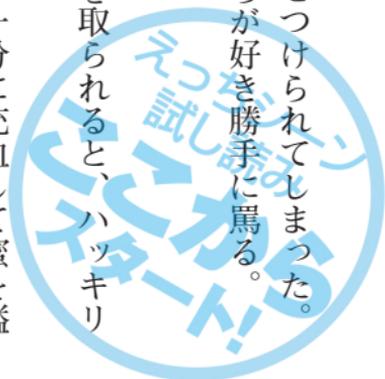
綺麗な形に揃った花卉は、蜜を纏って左右に開花し、襞の多い桃色粘膜を濡れてヒクつかせていた。

微細に膨れた尿口と、すぐ下で蜜をこぼす処女の肉孔。

指で左右に開かれているから、薄桃色の処女膜も見える。

ツルツルの会陰を越えた肛門はすでに蜜を纏っていて、薄カフェオレ色で小さく縦長。ヒクんと収縮をして、小さなシワを集めていた。

官能の媚顔と巨乳と乳首と、肉芽と尿口と後孔と膣孔。恥ずかしい箇所すべてに、人々の視線が容赦なく突き刺さってくる。



「あうう……っつ！」

（み、みんなに……見られてえ……っ！）

裸身引き回しも恥ずかしかったけれど、肉体を舐られての秘処公開は、比較にならない程の、死にも勝る恥ずかしさだ。

追い詰められた心はもう、逃げ出したいとか、そんなレベルではない。逃げる気力もなく、できればこの場で消えてしまいたい。

伝承者の少女が絶望に捕らわれるのを確認すると、エッジゴは遂に、決定的に心を砕く責めを課してきた。

脱力して開かれた処女の膣孔に、エッジゴの堅くて太い勃起が充てられる。

「っ——っひいっ！」

「怖いか？ 処女お。グッククク」

赤子の小指の先にも充たない小さな肉孔が、児童の手首ほども巨肉根で、ムリユつと押されていた。

ペニス先端の表面はツルツルで、しかし本体は無数の血管がドクドク脈打っている。肉の笠は高く開ききつていて、まるで少年の握り拳の如く。

女を犯し慣れているのだろう、全体は淫水灼けで黒く艶を見せていて、打たれる刀の如くな淫熱を発していた。

「いやあつ——ゆ、許してええつ！」

本能的に「犯される」と悟ったツバキは、無意識にも許しを請うてしまう。

さらに肉棒で処女孔を押されると、絶望しきった中でも破滅的な恐怖と焦燥を与えられてしまい、身じろぎをさせられて盗賊たちに笑われていた。

「さあて、お前を女にしてやるか。クックック」

背中を抱かれながら言われると同時に、堅い勃起が押し入ってくる。

柔らかい処女の粘膜が異物の侵入を必死に拒むものの、弱々しい襞は、かえって陵辱者の征服欲を煽り立ててしまう。

「いやつ——つは、あ、あ、あつ——はいるのつ：やめ、てええつ！」

男性どころか、自分の指すらも知らない膣壁を、一ミリ一ミリと分けられて、内部深くへと入り込まれてゆく。

理性が感じる恐怖と女体を感じる性への期待感に、心臓がドキドキと早鐘を打つ。

極薄い純潔の皮膜が、強姦を樂しむ勃起肉で押されると、処女剣士は体内から引き裂かれる恐怖で、悲鳴すら上げられなかった。

レイプから何とか逃れたいと、脱力しながらも裸尻を揺すってあかく黒髪の乙女。

背後で仁王立ちする強姦のリーダーは、ニヤけながら村中に響く大きな声で、剣士への処刑を言い渡した。

そして。

「ムサシノ・ツバキの処女つ、貫ったぜええつ！」

——つつつびつつ！

「つ——ついたあああああいいいいつ！」

盗賊リーダーの強姦勃起によつて、ツバキの処女が奪われてしまった。

胎内の浅い箇所で鋭い痛みが走つて、そして肉刺しされた膣孔からは、綺麗な喪失の証が、ス……と流れた。

剣戟少女への強姦劇に、村人たちも悲痛に視線を落とすしかできない。

処女強姦を果たしたエツジゴは、肉棒を奥まで埋めながら、更なる宣言。

「よく見ておけえつ！ 銀河に名を馳せた日ノ本一真流の伝承者、ムサシノ・ツバキを犯したのはあつ、誰だああつ?! そうだあつ、このオレえつ、エツジゴ・ルース様だあああつ!!」

背後抱きされたツバキは、太い勃起で胎内の奥まで犯されながら、耳の側での大声によつて子宮までもが振動させられていた。

「いたい いつ——つあはああつ——おくまでつ、きちややあああああああつ！」

瞳に涙を浮かべながら、堅いペニスで膣壁をムリヤリ開かれながら、さらに子宮口までもが貫かれる。

傷口を刃でえぐられるような痛みの中、聖宮の壁が強姦ペニスでノックされると、しかしその瞬間には、痛みが消失。

処女のツバキがまつたく知らない、下腹部全体が蕩けるような未知の性感が、ジワリと熱く広がりはじめていた。

「な、はああああつ——つなにをつ、したのううつ!？」

子宮で産まれた熱い波に、ヒザやつま先、背筋や心臓、脳までもが深く吞まれてゆく。強姦の恐怖で震えていた心臓の鼓動さえもが、女の本能で自身の性熱を高める為の鼓動へと、変化していた。

まるで、自分の身体が急速に、強姦魔に慣らされてゆくようで、怖い。

「つくはああつ——なかつ——お願ひいつ、もう取つてへええつ！」

最奥まで犯されたショックと、それに反する肉体の変化が恐ろしくて、少女は艶声の交じった悲鳴を上げる。

一方で、伝承者の乙女を犯した勝利の男は、処女腔の拙く愛らしい締めつけを、勃起のすべてで味わっていた。

「つへハハハつ、日ノ本一真流の女つてのは、マ○コも超一流だなああつ！ オレ様の勃起を細かい粒で締めつけて、キュウキュウに歓迎してやがるぜええつ！」

根元までの完全挿入を果たしたエッジゴは、自身が射精をする為だけの、力の強姦抽送

を開始する。

処女のツバキを氣遣うなど微塵もなく、背後から開脚の腿を抱き上げての、激しくて強い抜き差し。

——つづぷりゅウウウうつ、づぶぬりゅちゅッ、づぶヌプヅチゅぬユルづちユッ！  
裸尻を上下させられて、太くて堅い男性器を、ギリギリまで抜かれて最奥まで肉詰め。

「はひっ——ひいひいひいっ——つやつ、やめつ、はひっ、あつ、あつあつあはあああああああああつ——っ！」

女体を上下させられて犯されると、首が上下にカクカク揺れて、脳までもが異様に揺すられて酔わされてしまう。

男の力で突き上げられる肢体は、扇情的にくねって耐えて、肉の官能を得る事を覚えさせられてゆく。

剥き出しの巨乳は上下に大きく弾んで、先端の媚突もさらに上気して朱く硬化。白い肌が紅葉に染められてゆくと、霧状の恥汗をシットリと纏ってゆく。

そして、初めてを体験させられた無垢な子宮は、さらに未知なる女の性感覚を、確実に目覚めさせられつつあった。

「っお腹っ、おなかがっ、へんんんっ——おなかがっ、くるっちやふうううっ！」  
肉カリ部分まで抜かれると、子宮全体が物足りない絶対な感覚で責められる。

奥の奥まで埋められると、薄く充たされると同時に更なる欲求で、脳までが飢えさせられてしまう。

勃起を引かれると膣壁が男性器に強く吸いついてオネダリをして、ズツプリと埋められるともう離れたくないと愛しく強く抱擁する。

拙くも愛情タップリで強姦魔を持たず剣戟処女に、エッジゴは陵辱の肉詰めと罵りをやめない。

「強姦したオレを、ツバキのマ○コは懸命に締めつけてやがるぜえつ！ お前はもうオレに犯された事を、一生忘れられなくなつたんだぜええつ！ ツハハハハハッ！」

「そんなつ——っんはっあああつ——違ふつ、ちがふもんつ——つあああつ、おなかつ——つヅンヅンひちやつ、いやらあああああつ！」

強姦されて、惨めで悔しくて、理性は懸命に抵抗をする。

なのに、犯されて性感を目覚めさせられて、一方的に屈服させられてゆく肉体。腰は完全に脱力をして、なのに裸尻を官能的に振って、強姦魔の肉突きを甘受してしまう。

抜かれても犯されても、さらに強くとエッジゴを求めさせられる恥辱。

自分でもどうしようもない、女体の本能的な飢餓欲求。子宮から背筋を通つて脳までもが、勃起の重たい存在感で灼かれて、躡けられていった。

肉体の快感で理性が追いやられて、身体がさらに性熱を上げる。目の前が蕩けて音が遠

退き、子宮の飢餓感だけが狂おしい程に、強く膨張させられてゆく。

犯されて心が碎かれてゆく苦痛の限界が、いつしか女体の別なる限界に呑み込まれてゆくと、自ら素直に告げさせられてしまっていた。

「あはっ、あああああんっ——つもふうっ、おなか、ヘンになるうううっ！」

ツバキの瞳が性感で蕩ける。知らない性感でどうしてよいのか解らないと、女の本能が強姦魔に縋って、助けまで求めてしまっていた。

「クッククック、いいぞお。村の連中の前で、このままイかせてやるぜええっ！」  
言い放つと同時に、エッジゴは肉の突き刺しをさらに早める。

——つづちゅづぷりゅつ、トぶづプづぷりゆるプちユっ、ぶづぶづぶづぶつっ！

「んはっ——っイ、イ、ヤ、あ、あ、あ、あああああ——っそんなにつ、つよくひちやつ——っあんあんあんあんっ——わたひつ、こわれちゃふううううっ！」

柔らかい濡れ粘膜への、激しい堅肉抽送に、黒髪を乱して涙の媚顔。

強く突き上げられる女体は汗の粒をこぼしてくねられ、二つの剥き出し乳房は盛大に楕円を描いて、露めく肌をエロティックに見せつける。

パツパツの腿は汗で張りを引き立たせていて、脱力したブーツの美脚はフラフラと揺れて、犯される惨めさをさらにいやらしく見せていた。

強姦魔の肉を教えられる膈壁は、力強い抽送に新たな蜜で歓迎を表し、恋人のようにり

「はっ、かははうっ——っひゃめっ、へへえっ——っんあっああんんっ——おなが、キツキツうっ——っひきゆふっ、グリグリひちやああああっ——っ！」  
勃起が失せて狂いそうな飢餓感と、子宮壁を叩かれて脳が白光する程の充足感。相反する肉の悦楽を一瞬ごとに味わわされて、初な女体を責められて、性感漬けにされてしまう。犯されるまま身を起こされると、駅弁姿勢で汗散らす裸尻を、背後からノッポな強姦魔に襲われた。

「おオレはあ、こ、この尻があ、いいいなああ！」

触手みたいな指でお尻の頬を広げられて、蜜に濡れる後孔を横引きにされると、標準的な太さだけで異様に長い勃起が充てられる。

「ひっ——っ！」

「コココのバージンはあ、おオレのモノだあっ！」

耳元で叫ばれながら、膣壁と一緒に収縮する媚肛が、ツブンっど強く犯された。

排出しか知らなかった器官が挿入を教えられると、一瞬で強い排泄欲求に責められる。

同時に、S字結腸まで一気に姦入された女体は、内臓が圧迫される感覚に、僅かだけど呼吸が止まった。

前後から強姦魔に挟まれての、双孔肉詰め。

「っあはっ………っはああああっ………っ！」

深く息を吐くと、自らの排泄欲に責められる肛門が、異様に恥ずかしい。

後孔を楽しまれる羞恥も手伝つてなのか、腸粘膜の奥まで犯されると肉体が、蕩けるよ  
うな、不気味で深い悦楽に吞まれてゆく。

「はあ、はあああつ……こ、んなあつ……つ！」

腸内という内臓そのものを勝手に犯される恥辱感と、予想すらできなかった未知の性快感で、気がおかしくなりそうだ。

「おおなかつ、おひりいいいっ——つやめへつ、ホントにひっ——つくるつちやふうつ、くるつちやふんらからあつっ！」

——つ又ぶづちユるぶちゆつぶつ、ぬユるづちユるツ又ぶぬプぬぶ又ぶルゆつ！

腰打ちが始められると、もうどうしようもなかった。子宮を犯される性感で下半身が碎かれて、腸内を陵辱される悦楽で脳神経までもが蕩けてゆく。

肛門を貫く肉の熱で、裸尻全体が痺れさせられる。まるで背骨から脳までが、ダイレクトに電極で繋がれてしまったみたい、過敏で強すぎる甘電に晒され続けた。

ペニスを抜かれると安堵とともに排泄欲が収まるモノの、強烈な飢餓感に襲われる。腸の奥まで犯されると、強い飢餓感で狂わされながら、肉詰めの快感で全身が痺れた。

「おお前のケツう、ももう締めつけをう、お覚えたんだなあ！」

強姦魔に罵られると、周囲で待つ牡たちにもゲラゲラと笑われる。





らあつ！」

「つ、次のでんしょつ——っはいっ——にんしんんつ、中ラしいっ！」

力強い男たちの手で、両腕や両脚や黒い髪を掴まれる。それだけで、強姦悦楽に染められた肉体は、強い性興奮に灼かれてしまう。

後はもう、二人ずつとかではなかった。

「これほどデカパイだあ、二人同時だつて挟めるぜえつ！」

「縛つてある両手だつて、このままでも二本同時にしごかせられるぞつ！」

群がる欲獣たちは、ツバキの全身をできるだけ使おうと、各所に手を伸ばしてくる。

「見ろよ、この綺麗な黒髪いつ！ マ○コを犯す前に、この髪にかけてやらあつ！」

「あああ……お、おとこのひとつ——あふんつ……！」

自分でも解らない何かを咬こうとした唇が、臭い勃起に犯された。からかうように頬を叩かれながら、舌での奉仕を躡けられてゆく。

「おらあつ、オレのチンポ様、しゃぶれしゃぶれえつ！」

「んちゅ、ペロレロん……っんふうつ——ああ……おちんぼさま、太くて、堅くて、らいすきいいつ——んくんく、あぶうううつ！」

丸くて豊かな媚尻を突き出した騎乗位で、再度、子宮と腸を犯される。さらに谷間でのペニス愛撫や黒髪しごきをされながら、敏感な背筋を熱勃起でのヌル擦り愛撫に晒される。

縛られた両手を前に回されて、勃起を握らされる掌奉仕もさせられた。

二度も絶頂させられた肢体は、もう男性器の硬さと熱を擦りつけられるだけで、容易く絶頂へと上げられてしまう。

「んひやはうううううつ——つむねラめへええつ——イつちやひますふうつ——つあつあつあつ、あたまイヤああつ——ツバキつ、ごうかんおチンポさま、すきいいつつ!!」

教えられた恥告白を繰り返しながら、絶頂に次ぐ更なる絶頂へと、休みなく突き上げられ続けるツバキ。

「また、イきますつ——あぶんつ——んく、んく……んくんんんつ——んばはつ、せいえきいっ——おいしひいいいっ！ セイエキいっばいいいっ——ビュ〜ビュ〜っ！」

口内に吐き出された生臭い獣液を、少女は舐けられたとおりに呑み下していた。

頬が膨れるほど充たされると、牡精液の匂いで鼻腔から脳までもが穢される。

それなのに、歯の裏側にまで粘りつかれて喉に纏わりつく怖気の間感さえ、肉体は性感の一部として認識させられてゆく。

少女自身の蜜や、中出しされた子宮内と腸から溢れる、複数人の攪拌強姦液で、ツバキの足下には白くて臭い粘液の溜まりができています。

さらに牡たちの吐き出す性粘液で、黒髪や細い鼻筋、頬や脣、巨乳や背中や引き締まった下腹部までもが、ヌッチリと覆われていた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**